『比較日本文化学研究』第15号（2022）

論　文

頼三樹三郎漢詩訳註（1）

任　　萌萌
広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Annotation of Rai Mikisaburou's Poetry (1)

Ren Mengmeng

Abstract: Chinese literature in Japan refers to literature arising from the Chinese character culture from China accepted by the Japanese and developed as their own culture. The Edo period was the most prosperous period for poets and poetic works. Moreover, the literary genre of poetry can be considered as the most representative literary style at the end of the Edo period, and we will consider the poetry of Rai Mikisaburou, a renowned poet during this period. Rai Mikisaburou had inherited poetry talent from Rai Sanyou, and he had excellent qualities as a poet. However, studies on Rai Mikisaburou's poetry are fewer than expected. Rai Mikisaburou's Chinese poems at the end of the Edo period will be positioned through a detailed and in-depth analysis of his poems. In addition, a comparative study of Rai Sanyou's poetry is considered valuable for clarifying the influence of Rai Sanyou's poetry at the end of the Edo period.
Keywords: Rai Mikisaburou, Edo period, annotation, poetry

はじめに

頼三樹三郎は幕末志士・漢詩人として知られた。紹介について、近藤春雄編『日本漢文学大事典』（明治書院刊、1985年）を参照にして、次の通りである。

> 頼鴨厓、一八二五～一八五九。江戸時代の人。名は醇。字は子春・士春。通称は三樹三郎。号は鴨厓・古狂生・三樹。頼山陽の第三子で京都三本樹で生まれた。十七歳、大阪に出て、後藤松陰・篠崎小竹に従学し、翌年昌平黌に入った。佐藤一斎、菊池五山、梁川星巌などと交わり、詩文を善くした。勤王の志厚く、梁川星巌・梅田雲浜らと国事を論じ、攘夷の論をなし、安政の大獄に捕らえられて死刑した。時に安政六年十月七日、年三十五。著に北溟遺珠一巻・鴨厓先生一日百詩一巻がある。

頼三樹三郎は漢詩人であったことは良く知られた事実であるが、その漢詩に関しては、全体的注釈・解説が存在しておらず、その漢詩人としての全貌はこれまでほとんど明らかにされてこなかった。ここで、頼三樹三郎の漢詩を取り上げ、その訓読を行い、詳細な典故についての注釈を付し、現代日本語に訳し、中国や日本のこれまでの漢詩との影響関係を調べ、頼三樹三郎の漢詩の詳細にして綿密な分析を通して、中国古典への受容と幕末漢詩壇における位置付けについて考察する。

現存する頼三樹三郎の漢詩を整理して約600首を得て、天保12年（1841）から安政６年（1859）までの詩作である。本稿には頼三樹三郎が17歳の時、天保12年の漢詩の訳註を掲載した。本稿を作成するに当たって、本文は木崎好尚氏著『頼三樹伝』（今日の問題社、昭和18年）、真田秀吉氏集録及註『頼三樹詩集』（真田弘、昭和35年）、安藤英男氏著『鴨崖頼三樹全伝』（吟濤社、平成５年）などを参考にして、校勘した。頼三樹三郎の漢詩に関する研究の一環である。

１　「花塢夕陽」（１月）

【本文及び書き下し】

１長堤桃樹簇香氣	長堤の桃樹　香気を簇（むら）がらし
２斜日映來色如焚	斜日映（うつ）り来りて　色　焚の如し
３一片漁舟搖棹去	一片の漁舟　棹（さを）を揺（ゆ）して去り
４攪摧水面幾紅雲	水面を攪摧（かくさい）す　幾紅（いく）雲

※後藤松陰（1797～1864、名は機、字は世張）は二句目と四句目を次のように改刪した。「映取斜陽色如焚（斜陽を映取して　色　焚の如し）」、「紅波攪摧幾重雲（紅波　攪摧す　幾重の雲）」に改刪し、「叙景字字有色澤、佳作佳作。漁舟與桃字相應、暗裏用桃源故事。尤佳也。（叙景字々色沢あり、佳作々々。漁舟は桃の字と相応じ、暗裏に桃源の故事を用ゐる。尤も佳なり。」と評点をつけた。（『頼三樹伝』37頁より）

【日本語訳】

０夕日が桃の花咲く畑を照らす

１長い土手に生える桃の木の花はよいかおりを集めさせ

２夕日に照らされて色が火の焚くように赤い

３棹を揺るがして小さな一そうの漁船を進ませ

４水面に影を映しているいくらかの紅雲を砕く

【校勘】

○『詩集』、木崎本、安藤本

０「塢」、安藤本作「搗」。「搗」、恐らくは「塢」の誤り。

【押韻】

「焚」「雲」、上平十二文韻。

【語釈】

０花塢夕陽

［花塢夕陽］夕暮れ方の太陽が桃の花咲く畑を照らす。唐･厳維「酬劉員外見寄」詩（『全唐詩』巻二六二）に「柳塘春水漫、花塢夕陽遅」とある。

１長堤桃樹簇香氣　２斜日映來色如焚

［長堤］長くつらなったつつみ。長い土手。長堤と桃花と一緒に使うことが多い。唐･杜牧「残春獨來南亭因寄張祐」詩（『樊川集』巻二二）に「暖雲如粉草如茵、獨歩長堤不見人。一嶺桃花紅錦黦、半谿山水碧羅新」とあり、宋・牟獻之「送婁伯高遊呉」詩（『石倉歴代詩選』巻二七九）に「桃花水暖清明前、長堤柳色青如煙」とある。

［桃樹］桃の木。唐･白居易「雑感」詩（『白氏文集』巻二）に「犬齧桃樹根、李樹反見傷」とあり、唐・杜甫「風雨看舟前落花戯為新句」詩（『杜工部集』巻八）に「江上人家桃樹枝、春寒細雨出疏籬」とある。

［簇］集まる。唐・劉禹錫「百花行」詩（『全唐詩』巻三五四）に「爛熳簇顛狂、飄零勸行樂」とある。

［香氣］よいかおり。唐・李白「春日歸山寄孟浩然」詩（『李太白詩集注』巻一四）に「香氣三天下、鐘聲萬壑連」とあり、唐･孟浩然「夏日南亭懐辛大」詩（『孟浩然集』巻一）に「荷風送香氣、竹露滴清響」とある。

［斜日］斜めに照らす日。梁・簡文帝「納涼」詩（『芸文類聚』巻五）に「斜日晩駸駸、池塘生半陰」とあり、唐・雍陶「塞路初晴」詩（『文苑英華』巻一五五）に「晩虹斜日塞天昏、一半山川帶雨痕」とある。

［映來］影をうつして来る。宋・王安石「江上」詩（『王荊公詩注』巻四四）に「青山繚繞疑無路、忽見千帆隠映來」とあり、宋・陸游「雑詠」詩四首其二（『剣南詩稿』巻八）に「即今禾黍連雲處、當日帆檣隠映來」と見える。

［色如焚］色が火の焚くように赤い。『詩経』大雅・雲漢に「旱魃為虐、如惔如焚」とある。また明･馬中錫「發安塞」詩（『東田漫稿』巻三）に「塞門西

望益荒凉、山色如焚野日黄」とある。
３一片漁舟搖棹去　４攪摧水面幾紅雲
［漁舟］漁猟をする小さな舟。『顔氏家訓』省事篇十二に「伍員之託漁舟、季布之入廣柳」とある。唐・白居易「自思益寺次楞伽寺作」詩（『白氏文集』巻五四）に「行逢禪客多相問、坐倚漁舟一自思」とあり、「題崔少尹上林坊新居」詩（『白氏文集』巻六八）に「高下三層盤野徑、沿洄十里汎漁舟」とある。
［搖棹］水棹を揺るがす。唐・常建「夢太白西峰」詩（『全唐詩』巻一四四）に「春風又揺棹、潭島花紛紛」とある。
［攪摧］かき乱して破壊する。
［水面］水のおもて。水上。唐・白居易「錢塘湖春行」詩（『白氏文集』巻二〇）に「孤山寺北賈亭西、水面初平雲脚低」とある。
［紅雲］水面に影を映しているくれない雲。唐・王勃「七夕賦」詩（『文苑英華』巻二二）に「響曳紅雲歌面近、香隨白雪舞腰来」とある。宋・呂渭老「醉蓬萊」（『詞律』巻一五）に「碧縷墻頭、紅雲水面、柳堤花島」とある。

２　「春郊」（２月）

【本文及び書き下し】

１遙嶺逶迤明夕陽	遥嶺（えうれい）　逶迤（いい）として　夕陽明らかなり
２麥畦雲雀帶聲飛	麦畦（ばくけい）の雲雀（ひばり）　声を帯びて飛ぶ
３牧童睡着黄牛背	牧童（ぼくどう）　睡着（すいちゃく）し　黄牛の背に
４一路春風載夢歸	一路　春風　夢を載せて帰る

※後藤松陰はこの詩に対して「一讀、令人洗目洗耳、返太古之朴。帶字用得似西人。（一読、人をして目を洗ひて耳を洗ひ、太古の朴に返らしむ。帯の字、用ゐ得て西人（漢土の詩人）に似たり」と評価した。（『頼三樹伝』38頁より）
【日本語訳】
０春の郊外
１遠くの山がくねくねと続いて、夕日の光に照らされて明るく
２麦畑の雲雀が鳴きながら飛ぶ
３牧童が黄牛の背中に寝入り
４ひたすら春の穏やかな風に浴びて、夢中の身を載せて帰る

【校勘】
○『詩集』、木崎本、安藤本
２「聲」、『詩集』・安藤本皆作「馨」。「馨」、恐らくは「聲」の誤り。
【押韻】
「飛」「歸」、上平五微韻。
【語釈】
０春郊
［春郊］春の野。春の郊外。南朝斉・謝朓「杜若賦」（『謝宣城詩集』巻一）に「冒霜蹊以独蒨、當春郊而逕平」とある。
１遙嶺逶迤明夕陽　２麥畦雲雀帶聲飛
［遙嶺］はるか遠くの山。平安・小野末嗣「奉試賦得王昭君」（『経国集』巻一四）詩に「高巖猿叫重壇苦、遙嶺鴻飛隴水寒」とある。
［逶迤］くねくねと続いている。「古詩十九首」其十二（『文選』巻二九）に「東城高且長、逶迤自相属」とあり、李善注に引く王逸『楚辞』注に「逶迤長貌也」とある。
［明夕陽］夕日の光に照らされて明るいさま。宋・范成大「過平望」詩（『宋詩鈔』巻六一）に「寸碧闖高浪、孤墟明夕陽」とある。宋・戴昺「夏曼卿作新樓扁曰瀟湘片景來求拙畫且索」詩（『宋詩鈔』巻九七）に「四野留春色、千峰明夕陽」とある。
［麥畦］麦畑。唐・李賀「新夏歌」詩（『全唐詩』巻三九三）に「野家麥畦上新壠、長畛裴回桑柘重」とあり、唐・章碣「曲江」詩（『全唐詩』巻六六九）に「無窮羅綺填花徑、大半笙歌占麥畦」とある。
［雲雀］鳥名。百霊鳥ともいう。すずめ目ひばり科の小鳥。鳴き声が良いので古くから飼い鳥にされる。
［帶聲飛］鳴きながら飛ぶ。唐・李羣玉「湖寺清明夜遣懷」詩（『全唐詩』巻五六九）に「野雲將雨渡微月、沙鳥帶聲飛遠天」とある。
３牧童睡着黄牛背　４一路春風載夢歸
［牧童睡着黄牛背］牧童が黄牛の背中に寝入る。清・袁枚「所見」詩（『小倉山房集』巻二五）に「牧童騎黄牛、歌聲振林樾」を連想させる。袁枚（1716～1798）は清、銭塘の人、乾隆の進士である。その詩には性霊説を提唱し、性情の自由な流露と自然な表現を尊重する。王士禎の神韻説や沈徳潜の格調説と対立する。

［一路春風］ひたすら春の風に浴びる。唐・鄭谷「送徐端公南歸」詩（『文苑英華』巻二八二）に「一路春風裏、楊花雪滿衣」とある。宋・楊萬里「宿南嶺驛」二首其一（『宋詩鈔』巻七四）「山村富貴無人享、一路春風野菜香」とある。
［載夢］船などに夢中の身を載せる。宋・賀鑄「九月十日寄潘邠老」詩（『慶湖遺老集』巻九）に「尺紙緘愁去、扁舟載夢回」とある。

3　「送立齋遊九州（立斎の九州に遊ぶを送る）」（3月）

【本文及び書き下し】

1孤鶴高飛不可留	孤鶴（こかく）　高く飛びて　留む可からず
2江亭勸酒遣離憂	江亭　酒を勧めて　離憂を遣（や）る
3多情最是欄前水	多情　最も是れ　欄前の水
4千里隨君到九州	千里　君に随（したが）ひ　九州に到る

【日本語訳】
0頼立斎が九州に遊歴することを送る
1君は高い空を飛ぶ鶴と同じように引き留めることはできない
2川沿いのあずまやに酒を飲むことで離別の悲しい気持ちを紛らわせたい
3感情の深さはもっとも廻らした欄杆の前に流れていく水
4遠い道のりで君とともなって九州へ行く
【校勘】
○『詩集』、木崎本、安藤本
　異同無
【押韻】
「憂」「州」、下平十一尤韻。
【語釈】
0送立齋遊九州
［立齋］頼立斎（1803～1863）。江戸時代後期の儒者。頼山陽の甥。名は綱、字は士常、通称は常太郎。京都で細川林谷に篆刻を学び一家をなす。のち山陽に詩文をまなんだ。享年61歳。東山長楽寺に葬る。（『日本人名大辞典』より）
［遊］故郷を離れて遊学する。
1孤鶴高飛不可留　2江亭勸酒遣離憂

［孤鶴高飛］群から逸れた一羽の鶴が自由に高い空を飛ぶ。「孤客（こかく）」の読み方と同じ。立斎が一人で九州へ旅をすることを暗示する。宋・蘇轍「任氏閲世堂前大檜」詩（『欒城後集』巻三）に「壯夫連臂不能抱、孤鶴高飛直上立」とある。「孤鶴」は群から逸れた一羽の鶴。唐・錢起「薬堂秋暮」詩（『全唐詩』巻二三八）に「潭静宜孤鶴、山深絶遠鐘」とある。「孤雲野鶴」という言葉があり、世俗を捨てた隠者の喩。唐・劉長卿「送方外上人」詩（『萬首唐人絶句詩』巻六）に「孤雲將野鶴、豈向人間住」と見える。「高飛」は空高く飛ぶ、『詩経』小雅・柳に「有鳥高飛、亦傅于天」とある。

［不可留］引き留めることができない。唐・李白「宣州謝朓樓餞別校書叔雲（一作倍侍御叔華登樓歌）」（『李太白集』巻一六）に「棄我去者昨日之日不可留、亂我心者今日之日多煩憂」とある。

［江亭］川沿いのあずまや。唐・岑参「南亭送鄭侍御還東臺」詩（『唐百家詩選』巻四）に「江亭酒甕香、白面繡衣郎」とある。

［勸酒］お酒を飲みたまえと勧める。唐・白居易「酬哥舒大見贈」詩（『白氏文集』巻一三）に「花下忘歸因美景、尊前勸酒是春風」とある。

「遣」気を紛らす。気晴らしをする。南朝梁・任昉「出郡傳舍哭范僕射」（『文選』巻二三）詩に「將乖不忍別、欲以遣離情」とある。

［離憂］別れの悲しみ。唐・李端・「宿淮浦憶司空文明」詩（『全唐詩』二八六）に「愁心一倍長離憂、夜思千重恋旧遊」とある。

３多情最是欄前水　４千里隨君到九州

［多情］情愛が深く感じやすいこと。感情に富むこと。唐・張泌「寄人」詩（『全唐詩』巻七四二）に「多情只有春庭月、猶為離人照落花」とある。宋・柳永「雨零鈴」（『唐宋諸賢絶妙詞選』巻五）に「多情自古傷離別、更那堪、冷落清秋節」とある。

［最是］もっとも、一番。唐・元稹「憑李忠州寄書樂天」詩（『全唐詩』巻四一五）に「傷心最是江頭月、莫把書將上庾樓」とある。

［欄前水］欄杆の前に流れた水。「多情」と「水」が漢詩によく一緒に使われる。唐・李咸用「送從兄入京」詩（『全唐詩』巻六四六）には「多情流水引歸思、無頼嚴風促別觴」とある。宋・蘇軾「南柯子・寓意」（『東坡詞』）に「藍橋何処覓雲英、只有多情流水、伴人行」と見える。

［千里隨君］たいへん遠い道のりで君と伴い行く。宋・厳羽「送呉會卿再往淮南」詩（『滄浪集』巻三）に「明月高懸五兩頭、随君千里過淮流」とある。

明・楊慎「賦得千山紅樹圖送楊茂之」詩（『四朝詩』巻三一二）に「錦城紅樹那能見、千里隨君夢裏攀」とある。
［九州］筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・大隅・薩摩の九か国。

４　「寄兄聿庵（兄聿庵に寄す）」（３月）

【本文及び書き下し】

１展墳千里朝露足　　墳を展（み）て　千里　朝露足り
２回首一門曉星殘　　回首して　一門　暁星残る

※七言律詩の対句（『頼三樹伝』38頁より）

【日本語訳】

０長兄聿庵に送る
１墓をお参りするに非常に遠い道のり、久しくなくても満足であり
２回想して昔は賑やかだった一門に、今は聿庵一人が夜明の星として生き残っている

【校勘】

○『詩集』、木崎本
０木崎本作「聿庵伯兄に寄す」。
１「朝露足」、『詩集』作「足朝露」。恐らくは語順の誤り。

【語釈】

０寄兄聿庵
［聿庵］頼聿庵（1801～1856）。江戸時代後期の儒者。字は承緒。通称は余一。頼山陽の長男。安芸広島藩士。父が脱藩したため、祖父頼春水の跡をつぐ。藩の学問所につとめ、のち藩主浅野斉粛の長男慶熾の侍講となる。家塾天日堂でもおしえ、山陽の著作の出版につとめる。書にすぐれた。遺作に『聿庵詩稿』など。（『日本人名大辞典』より）
１展墳千里朝露足　２回首一門曉星殘
［展墳］墓参りをする。展墳。宋・朱長文「送知府滕光禄」詩（『四朝詩』巻六七）に「展墳乍覺青松長、視學追懷絳帳開」とある。
［千里］千里ほどの遠い道のり。『荀子』勧学に「故不積蹞步無以至千里、不積小流無以成江海」とある
［朝露］久しくない、はかないもののたとえ。魏晉・曹操「短歌行」（『文選』巻二）に「譬如朝露、去日苦多」とあり、李善注に「『漢書』李陵謂蘇武曰、

『人生如朝露』」とある。
［回首］過ぎ去ったことを思い浮かべること。唐・杜甫「將赴荊南寄別李劍州」詩（『杜工部集』巻一三）に「戎馬相逢更何日、春風回首仲宣樓」とある。宋・蘇軾「觀湖」詩（『東坡續集』巻二）に「回首不知沙界小、飄衣猶覺色塵高」とある。
［一門］親族関係にある人々の総称。一家族。唐・杜甫「送鮮于萬州遷巴州」詩（『杜工部集』巻一六）に「京兆先時傑、琳琅照一門」とある。
［曉星］夜明けの空には星の見えるのがまばらなところから、数の少ないもののたとえ。斉・謝朓「京路夜發一首」詩（『文選』巻二七）に「曉星正寥落、晨光複泱漭」とある。
［殘］のこす。のこる。唐・皇甫冉「宿洞靈觀」詩（『文苑英華』巻二二六、『全唐詩』巻二五〇）に「客來清夜久、仙去白雲殘」とある。

5　「送關藤藤陰自江戸歸笠岡（関藤藤陰の江戸より笠岡に帰るを送る）」（７月）

【本文及び書き下し】

1君發東都取長途	君東都を発ち　長途を取り
2偶過津城訪寓居	偶津城に過ぎ　寓居を訪ふ
3別來早已隔九歳	別来　早く已に　九歳を隔ち
4相見無語只悽如	相ひ見て　語無く　ただ悽如たり
5居諸眞是過隙駒	居諸　真に是れ　隙を過ぐる駒なり
6憶昨君寓鴨川隅	憶ふらく　昨　君　鴨川の隅に寓るを
7彦容一逝遂難逐	彦容　一たび 逝かば　遂に逐ひ難し
8吾時童稚失庭趨	吾時に童稚にして　庭趨を失ふ
9可慙生來寸長無	慙づ可し　生来　寸長無く
10恰為井蛙跛鼈徒	恰も　井蛙跛鼈の徒為るを
11吾辱即是先君辱	吾が辱　即ち是れ　先君の辱なり
12大業不成奈此軀	大業の成らざる　此の躯を奈せん
13聞君江都授生徒	聞くならく　君は江都に　生徒に授くと
14不遠定是作名儒	遠からずして　定めて是れ　名儒と作らん
15共感往事涕珠拂	共に往事に感じて　涕珠を払ひ
16秋風暮雨叩窗梧	秋風暮雨　窓梧を叩く
17君今省鄕問安否	君　今　鄕に省みて　安否を問ふ

18途上早冷愛体膚　　途上　早冷　体膚を愛(いつくし)めよ
19君有賢主加恩遇　　君　賢主の恩遇を加(くわ)ふる有らん
20秋歸豈是為鱸魚　　秋帰　豈に是れ　鱸魚の為ならんや
21欲去且牽君之衣　　去らんと欲するも　且(しばら)く　君の衣を牽(ひ)く
22明朝一別秦與胡　　明朝　一たび別らば　秦と胡とならん

【日本語訳】

０関藤藤陰が江戸から笠岡に帰るのを送る
１君が江戸から出発して長い道のりを選び
２たまたま大坂を通り過ぎて私に訪ねた
３別れてから已に九年ぶりに隔て
４再会する時に言葉が言わずただ悲しみに沈んだ
５歳月はまことに壁の隙間からあっけなく過ぎる白馬のように早い
６君はかつて鴨川のほとりに泊まることを思い起こす
７親がいったん逝去すればついに従い難しい
８私は幼い頃父の教えを失った
９恥じるべきことは生まれてからわずかな長所もなく
10ちょうど井底の蛙や足の不自由なすっぽんの同類になる
11私の恥は即ち亡父の恥であり
12大きな事業にならないとこの身をいかに処置するのか
13君は江戸に門弟を教えることを聞き
14近いうちに必ず名高い儒者に当たる
15過ぎ去ったことをしみじみと心に共感して流れた涙を払い
16秋に吹く風と夕暮れに降る雨は窓前の梧桐を叩く
17君は遠く離れた故郷に訪れてごきげんを伺い
18道中に涼しいのでお体を大事にしてください
19君は福山藩主阿部正弘が与える知遇の恩恵があるが
20秋に帰るのはおそらく故郷への思い出が強いからであろう
21ひとまず離れようとする君の衣を引っ張り
22これからいったん別れたら蘇武と李陵のように遠く離れるだろう

【校勘】

○『詩集』、木崎本、安藤本
12「軀」、『詩集』、木崎本、安藤本均作「躬」。「躬」上平一東韻、恐らくは

「軀」の誤り、ここで校正した。
21「且」、『詩集』と安藤本作「旦」。
【押韻】
「居」「如」「魚」、上平六魚韻。「隅」「趨」「徒」「軀」「儒」「梧」「膚」「胡」、上平七虞韻。魚・虞同用。
【語釈】
０送關藤藤陰自江戸帰笠岡
［關藤藤陰］（1807～1876）幕末の武士、儒者。備中（岡山県）出身。名は成章。字は君達。通称は和助。関藤政信の子。関政方の弟。一時石川姓を称す。頼山陽にまなび、天保14年備後広島県福山藩の儒官となる。のち家老に就任、幕府老中となった藩主阿部正弘を補佐した。著作に「観国録」「蝦夷紀行」など。（『日本人名大辞典』より）
［江戸］東京の前称。
［笠岡］備中南西端の市。藤陰の出身地。
１君發東都取長途　２偶過津城訪寓居
［發］出立する。『水経注』江水に「有時朝發白帝暮到江陵」とあり、唐・杜甫「最能行」詩（『杜工部集』巻七）に「朝發白帝暮江陵、頃來目擊幸有徵」と見える。
［東都］江戸をしゃれていう呼び名。中島棕隠『都繁昌記』（天保八年）序に「元享間關左諸儒、喜劉漢之事言、擬彼有兩都、稱江戸為東都（元享の間関左の諸儒、劉漢の事言を喜び、彼の両都有るに擬ひ、江戸を称して東都と為す）」とある。
［取長途］遠い道のりを選ぶ。唐・杜甫「江漢」詩（『杜工部集』巻一五）に「古來存老馬、不必取長途」とある。
［偶過］たまたま通る。唐・張継「河間獻王墓」詩（『全唐詩』巻二四二）に「偶過河間尋往跡、卻憐荒冢帶寒煙」とある。
［津城］渡し船の発着する城。大坂を指す。北朝斉・蕭愨「奉和濟黄河應教」詩（『文苑英華』巻一七九）に「津城度維錦、岸柳夾緹油」と見える。
［訪］訪問する。唐・孟浩然「洛中訪袁拾遺不遇」詩（『孟浩然集』巻四）に「洛陽訪才子、江嶺作流人」とある。
［寓居］自分の家をへりくだっていう語。張衡「西京賦」（『文選』巻二）に「鳥畢駭、獸咸作、草伏木棲、寓居穴託」とある

３別來早已隔九歳　４相見無語只悽如

［別來］別れて以来。南朝宋・謝恵連「代古」詩（『玉台新詠』巻三）に「別來經年歳、歡心不可凌」とある

［早已］早々。南朝宋・謝霊運「南樓中望所遅客」詩（『文選』巻三〇）に「圓景早已滿、佳人猶未適」とある

［隔］時間が久しく離れる。

「九歳」九年。

［相見］別れていた者が再会する。漢・楽府「古詩為焦仲卿妻作」（『玉台新詠』巻一）に「賤妾留空房、相見常日稀」とある。

［無語］何も言わないこと。黙っていること。宋・柳永「雨零鈴」（『唐宋諸賢絶妙詞選』巻五）に「執手相看淚眼、竟無語凝噎」とある。

［悽如］悲しみに沈むさま。西晋・陸機「上留田行」楽府（『陸士衡文集』巻七）に「我思纏綿未紓、感時悼逝悽如」とある。

５居諸眞是過隙駒　６憶昨君寓鴨川隅

［居諸］大陽と月。歳月。『詩経』邶風・栢舟に「日居月諸、胡迭而微」とあるところから、助詞の居、諸を借りて、日月を表した。唐・韓愈「符読書城南」詩（『昌黎先生文集』巻六）に「豈不旦夕念、為爾惜居諸」と見える。

［眞是］まことに、本当に。唐・白居易「自歡」詩（『白氏文集』巻五四）に「因循過日月、眞是俗人心」とある。

［過隙駒］年月の過ぎ去ることの、きわめて早いたとえ。歳月は、白馬が駆け過ぎるのを壁の隙間からちらりと見るように、あっけなく過ぎる。『荘子』外篇・知北遊に「人生天地之間、若白駒之過郤、忽然而已」とあり、陸德明注に「白駒、或云日也。郤、本亦作隙。隙、孔也。」とある。『漢書』張陳王周伝に「人生一世間如白駒之過隙」とある。唐・温庭筠「病中書懐呈友人」詩（『温庭筠詩集』巻六）に「郷思巣枝鳥、年華過隙駒」と見える。

［憶昨］過去を思い起こす。唐・白居易「寄李十一建」詩（『白氏文集』巻五）に「憶昨訪君時、立馬扣柴荊」とある。

［寓］仮に泊まる。一時的に身を寄せる。

［鴨川］京都市東部を流れる川、京都と大坂を結ぶ水路として利用された。

７彦容一逝遂難逐　８吾時童稚失庭趨

［彦容］才徳のすぐれた様子。ここで父・山陽のことを指す。

［一逝］いったん逝去すれば。魏・曹植「洛神賦」（『文選』巻一九）に「悼良

會之永絶兮、哀一逝而異鄕」とある。
［遂難逐］ついに従い難しくなる。用例は見当たらないが、南北朝・王褒「日出東南隅行」（『楽府詩集』巻二八）に「少年任俠輕年月、珠丸出彈遂難追」とある。
［吾時］私はその時に。宋・蘇軾「辨道歌」詩（『東坡続集』巻三）に「烏輪即晩蟾影斜、吾時俱睹超雲霞」とある。
［童稚］幼子。唐・劉長卿「送姨子弟往南郊」詩（『劉隨州集』巻一一）に「別時兩童稚、及此俱成人」とある。
［庭趨］父の教えを受ける。『論語』季氏に「嘗獨立、鯉趨而過庭、曰、『學詩乎』。對曰、『未也』。『不學詩、無以言也』。鯉退而學詩。他日又獨立、鯉趨而過庭。曰、『學禮乎』。對曰、『未也』。『不學禮、無以立』。鯉退而學禮。」とある。
９可慙生來寸長無　10恰為井蛙跛鼈徒
［可慙］恥ずかしがるに値する。『後漢書』何敞伝に「匈奴無逆節之罪、漢朝無可慚之恥」とある。
［生來］生まれて以来。唐・白居易「羅子」詩（『白氏文集』巻一六）に「有女名羅子、生來纔兩春」とある。
［寸長］わずかな長所。梁・沈約「與范述曾論竟陵王賦書」（『芸文類聚』巻五八）に「仰酬睿旨、微表寸長」とある。
［井蛙］見識の狭いもののたとえ。井底の蛙。『荘子』秋水に「井蛙不可以語於海者、拘於虚也。夏虫不可以語於冰者、篤於時也」とあり、宋・蘇軾「辨道歌」（『東坡続集』巻三）に「吾恨爾見有所遮、海波或至驚井蛙」とある。
［跛鼈］足の不自由なすっぽん。『荀子』修身篇に「故蹞歩而不休、跛鼈千里、累土而不輟、丘山崇成」とある。
［徒］同類。『春秋左傳正義』襄公三十年に「豈為我徒」とあり、杜預曰「徒、黨也。言不以駟、良為黨」とある。
11吾辱即是先君辱　12大業不成奈此軀
［辱］あやまち。過失。恥と思う。
［先君］死亡した父親や祖先を敬っていう語。ここは父・山陽を指す。『詩経』邶風・燕燕に「先君之思、以勖寡人」とある。
［大業］大きな事業。重大な事業。
［不成］ものにならないこと。『楚辞』九弁に「生天地之若過兮、功不成而無

効」とある。
［奈］どのように対処する。いかに処置する。
13聞君江都授生徒　14不遠定是作名儒
［聞君］君のことを聞く。南朝斉・謝朓「和王中丞聞琴」詩（『謝宣城詩集』巻四）に「蕙氣入懐抱、聞君此夜琴」とある。唐・白居易「與微之書」（『白氏文集』巻二八）に「殘燈無焰影幢幢、此夕聞君謫九江」とある。
［江都］江戸の別名。漢語風な言い方。
［授生徒］門弟を教える。『後漢書』馬融伝に「常坐高堂、施絳紗帳前、授生徒」とある。
［不遠］近いうちに。西晉・陸機「君子行」（『文選』巻二八）に「去疾苦不遠、疑似寶生患」とある。
［定是］必ず…である。南朝梁・任昉「答到建安餉杖」詩（『芸文類聚』巻六九）に「定是湘妃淚、潸灑遂璘彬」とある。
［名儒］名高い儒者。すぐれた学者。『漢書』匡衡伝に「望之名儒、有師傅舊恩、天子任之、多所貢薦」とある。
［作］任に当たる。唐・杜甫「官定後戲贈」詩（『杜工部集』巻九）に「不作河西尉、淒涼為折腰」とある。
15共感往事涕珠拂　16秋風暮雨叩窗梧
［共感］他人の考え、主張、感情を、自分もその通りだと感じること。また、その気持。唐・白居易「同王十七庶子李六員外鄭二侍御同年四人遊龍門有感而作」詩（『白氏文集』巻五八）に「各從祿仕休明代、共感平生知己恩」とある。
［往事］過ぎ去ったこと。唐・劉長卿「南楚懐古」詩（『文苑英華』巻三〇八）に「往事那堪問、此心徒自勞」とある。
［涕珠］涙珠。涙のしずく。唐・白居易「喙木曲」（『白氏文集』五一）に「我有雙涙珠、知君穿不得」とある。
［拂］払い去る。唐・柳宗元「晨詣超師院讀禪經」詩（『河東先生集』巻四二）に「汲井漱寒齒、清心拂塵服」とある。
［秋風暮雨］秋に吹く風と夕暮れに降る雨。唐・張籍「和崔駙馬聞蟬」詩（『張文昌文集』巻二）に「鳳凰樓下多歡樂、不覺秋風暮雨天。」とある。魏・曹丕「燕歌行」詩（『文選』巻二八）に「秋風蕭瑟天氣涼、草木揺落露為霜」とあり、宋・柳永「八聲甘州」（『詞品』巻三）に「對蕭蕭暮雨灑江天、一番洗清

秋」とある。梁川星巌「秋夕書懐寄弟」詩（『星巌集』丙集）に「余生廓落難為計、暮雨森沈欲作霖」とある。
［叩］たたく。唐・韋應物「永定寺喜辟強夜至」詩（『全唐詩』巻一九三）に「夜叩竹林寺、山行雪滿衣」とある。
［窗梧］窓前の梧桐。唐・韋應物「答王郎中」詩（『全唐詩』巻一九十）に「池荷涼已至、窗梧落漸頻」とある。
17君今省郷問安否　18途上早冷愛体膚
［省郷］「省親」と同じ、遠く故郷を離れていた者が親族を見舞う。
［問安否］無事かどうかを問う。訪れてごきげんを伺う。宋・陸游「題龍鶴菜帖」詩（『剣南詩稿』巻四）に「萬里一紙書、殷勤問安否」とある。
［早冷］「早涼」と同じ、初秋に早く来た涼しさ。唐・韋応物「夜直省中」詩（『全唐詩』巻一九三）に「河漢有秋意、南宮生早涼」とある。
19君有賢主加恩遇　20秋歸豈是為鱸魚
［賢主］才能に優れ、人徳のある君主。福山藩主阿部正弘（1819〜1857）を指す。
［恩遇］天子（ここは阿部正弘）の恩恵ある知遇。
［秋歸］秋に帰る。宋・蘇軾「蓼嶼」詩（『東坡集』巻七）に「秋歸南浦螅蛄鳴、霜落横湖沙水清」とある。
［鱸魚］すずき。ここで故郷を思う気持ちが強いことを指す。晋・張翰「思呉江歌（一作秋風歌）」（『古詩紀』巻三九）に「秋風起兮佳景時、呉江水兮鱸魚肥」とあり、『晋書』張翰伝に「翰因見秋風起、乃思呉中菰菜蓴羹鱸魚膾、曰、『人生貴得適志、何能羈宦數千里以要名爵乎』、遂命駕而歸」とある。
21欲去且牽君之衣　22明朝一別秦與胡
［欲去］離れようとする。西晋・潘岳「悼亡詩三首」其三（『文選』二三）に「徘徊墟墓間、欲去複不忍」とある。
［且］ひとまず。少しの間。唐・杜甫「石壕吏」詩（『杜工部集』巻二）に「存者且偸生、死者長已矣」とある。
［牽君之衣］君の衣を引っ張る。別れの気持ちを表す。唐・孟郊「古別離」詩（『全唐詩』巻三七二）に「欲別牽郎衣、郎今到何處。不恨歸來遲、莫向臨邛去」とある。
［明朝］これから。明日の朝。唐・厳維「歳初喜皇甫侍御至」詩（『全唐詩』巻二六三）に「明朝別後門還掩、脩竹千竿一老生」とある。

［一別］ひとたび別れること。唐・白居易「長恨歌」（『白氏文集』巻一二）に「含情凝睇謝君王、一別音容兩渺茫」とある。頼山陽「既別憶母」詩（『頼山陽詩集』一九）に「板輿一別音容邈、投宿今宵何処村」とある。
［秦與胡］遠く離れる。「漢蘇武別李陵」詩（『芸文類聚』巻二九）に「雙鳧俱北飛、一鳧独南翔。子當留斯館、我當歸故郷。一別如秦胡、會見何詎央。愴恨切中懐、不覺涙霑裳。願子長努力、言笑莫相忘」と見える。

6　「寄兄支峰（兄支峰に寄す）」（11月10日）

【本文及び書き下し】

１海山萬里雖途迥　　海山　万里　途　迥なりと雖も
２知君思郷同吾意　　知る　君が郷を思ふ　吾が意に同じからんことを
３何時共歸京洛去　　何の時か　共に京洛に帰去し
４聖護林外看櫻花　　聖護林外に　桜花を看ん

【日本語訳】

０兄支峰に送る
１海山のはるか彼方の土地にいて遠く隔たっても
２君が故郷を懐かしくことは私の気持ちと同じだとわかる
３いつになったら一緒に京都に帰ってきて
４聖護院森の外に花見をしよう

【校勘】

○『詩集』、木崎本、安藤本
４「櫻花」、木崎本作「梅花」。

【押韻】

「意」、去声四寘韻。「花」、下平六麻韻。

【語釈】

０寄兄支峰
［支峰］頼支峰（1823～1889）。幕末・明治時代の儒者。名は復。字は士剛。通称は復二郎、又次郎。京都出身。頼山陽の次男。頼三樹三郎の兄。家学をつぎ、後藤松陰、牧百峯にまなぶ。東京遷都に際し天皇に随行。昌平学校教授、大学少博士となった。晩年父の書『日本外史』の標注本をつくった。著作に『神皇紀略』など。（『日本人名大辞典』より）
１海山萬里雖途迥　２知君思郷同吾意

［海山萬里］海山の遠い距離。唐・顧況「酬漳州張九使君」詩（『全唐詩』巻二六四）に「山海万里別、草木十年秋」とある。北宋・蔡襄「至和雑書五首八月二日」詩（『莆陽居士蔡文公文集』巻三）に「海山萬里風涛外、扶桑未老成春絲」とある。
［迥］非常にへだたるさま。遠い。南朝宋・謝霊運「登江中孤嶼一首」詩（『文選』巻二六）に「懐雑道轉迥、尋異景不延」とある。
［思郷］ふるさとをなつかしく思うこと。唐・白居易「客中守歳」詩（『白氏文集』巻一三）に「守歳樽無酒、思郷涙滿巾」とある。頼山陽「書懐」詩（『山陽詩鈔』巻一）に「孤燈依約思郷夢、一剣蒼茫報国心」とある。
３何時共歸京洛去　４聖護林外看櫻花
［共歸京洛去］共に京都に帰ろう。晋・陶淵明「歸去來一首」（『文選』巻四五）に「歸去來兮、田園將蕪胡不歸」とある。唐・姚合「詠貴遊」詩（『全唐詩』五〇二）に「日暮垂鞭共歸去、西園賓客附龍鱗」とある。
［聖護］京都市左京区聖護院。聖護院の付近は大きな森をなし、聖護院の森と呼ばれた。山陽の遺愛の地である。三樹三郎は幼い頃、父に連れられ、支峰と共にここで花見をしたことがあるだろう。
［林外］森のそと。唐・杜甫「登牛頭山亭子」詩（『杜工部集』巻一二）に「路出雙林外、亭窺萬井中」とある。

７　「聽人演平語（人の平語を演ずるを聴く）」（11月）

※七言長古詩である（『頼三樹伝』41頁より）が、原文は存在しない。

８　「次秋渚詩（秋渚（しうしょ）の詩に次（じ）す）」（11月）

【本文及び書き下し】
１×××××××
２×××××××
３醉後何知夜深淺　　醉後（すいご）　何（なん）ぞ　夜の深浅を知らん
４半輪寒月在松枝　　半輪（はんりん）の寒月（かんげつ）　松枝（しょうし）に在り
【日本語訳】
０秋渚の詩に唱和する。
３酔っぱらった後どうして夜色の濃さと薄さを知るのか
４松の枝に寒い夜に光の冷たく冴えわたった半輪の月があるからだ

【校勘】
○『詩集』、木崎本
　異同無
【語釈】
０次秋渚詩
［次］唱和する。人の作った詩の韻字に合わせて詩を作る。
［秋渚］竹原の頼喜六、頼春風の孫、当時22歳。
３醉後何知夜深淺　４半輪寒月在松枝
［醉後］酒に酔ったのち。酔っぱらったあと。唐・高適「醉後贈張九旭」詩（『全唐詩』二一四）に「興来書自聖、醉後語尤顛」とある。
［夜深淺］夜色の濃いことと薄いこと。唐・陳閏「宿北樂館」詩（『文苑英華』巻二九八）に「欲眠不眠夜深淺、越鳥一聲空山遠」とある。
［半輪］一輪の半分。半円形。唐・李白「峨眉山月歌」詩（『李太白集』巻七）に「峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流」とある。
［寒月］寒い夜に光の冷たく冴えわたった月。冬の月。唐・杜甫「北征詩」詩（『杜工部集』巻二）に「夜深經戰場、寒月照白骨」とある。
［松枝］松の枝。まつがえ。唐・釈霊一「僧院」詩（『文苑英華』二三六）に「虎溪閑月引相過、帶雪松枝掛薜蘿」とある。

９　「送従兄秋渚歸省（従兄秋渚の帰省に送る）」（11月）

【本文及び書き下し】

１君棄吾去使吾孤	君　吾を棄て去るに　吾をして孤ならしめ
２筆硯何時復與俱	筆硯（ひっけん）　何（いずれ）の時か　復（また）与（とも）俱にす
３君喜石尤滯歸漿	君は喜（よろこ）ぶ　石尤（せきいう）　帰漿を滞（とどこお）り
４君恨不及喫鄉鱸	君は恨む　郷鱸を喫（く）わせるも及ばず
５臨別欲贐無一物	別れに臨み　贐（はなむけ）せんと欲するも一物（いちもつ）無し
６且呵凍筆訴吾愚	且（か）つ凍筆（とうひつ）を呵（か）して　吾の愚（おろ）かを訴（うった）ふ
７明年廣陵逢今日	明年　広陵にて　今日に逢（あ）はば
８君誦此詩憶吾無	此の詩を誦（しょう）して　吾を憶（おも）ふやいなや

【日本語訳】
０従兄秋渚の故郷に帰ることを送る
１君は私を棄て離れて、私を独りぼっちさせてしまい

２いつになったらまた一緒に詩文を作ろう
３君は逆風が帰りゆく水を止まることをうれしく思い
４君は故郷を思う気持ちの強さに及ばざることを残念に思う
５別れんとするときに物を贈りたいが何ひとつもない
６ひとまず凍っている筆に息をはいて詩に私の愚かさを訴える
７来年広島に今日と同じ期日に逢えば
８君はこの詩を詠んで私のことを思い出すのか

【校勘】
○『詩集』

【押韻】
「俱」、「鱸」、「愚」、「無」上平七虞韻。

【語釈】
０送従兄秋渚歸省
［従兄］年上の男のいとこ。
［歸省］故郷に帰る。唐・朱慶餘「送張景宣下第東歸揚州覲省」詩（『全唐詩』巻五四）に「歸省値花時、閑吟落第詩」とある。
１君棄吾去使吾孤　２筆硯何時復與俱
［筆硯］詩文を作り、書物を著すこと。北斉・顔之推『顔氏家訓』雑芸に「猶以書工、崎嶇碑碣之間、辛苦筆硯之役」とある。
［復與俱］もう一度いっしょにいる。唐・孟浩然「同盧明府早秋宴張郎中海亭」詩（『孟浩然集』巻四）に「華省曾聯事、仙舟復與俱」とある。
３君喜石尤滯歸漿　４君恨不及喫鄉鱸
［石尤］石尤風ともいう。船が出帆しようとする時に起こる逆風。南朝宋・孝武・劉裕「丁督護歌二首」其一（『玉台新詠』巻一〇）に「願作石尤風、四面斷行旅」とあり、唐・陳子昂「初入峽苦風寄故鄉親友」詩（『全唐詩』巻八四）に「寧知巴峽路、辛苦石尤風」とある。元・伊世珍『瑯嬛記』巻に引く『江湖紀聞』に「石氏女嫁為尤郎婦、情好甚篤、為商遠行、妻阻之、不從。尤久不歸、妻憶之病亡、臨亡長歎、曰、『吾恨不能阻其行、以至于此、今凡有商旅遠行、吾當作大風為天下婦人阻之』。自後商旅發船、値打頭逆風則曰、此石尤風也」とある。
［滯］止まって動かない。『楚辞』九章・涉江に「船容與而不進兮、淹回水而凝滯」とあり、王逸注に「滯、留也」とある。魏・何晏「景福殿賦」（『文選』

巻一一）に「烏企山峙、若翔若滯」とあり、呂向注に「滯、止也」とある。
［歸漿］帰りゆく水。「帰水」と同じ。唐・李白「白頭吟」詩（『李太白集』巻四）に「東流不作西歸水、落花辭條羞故林」とある。
［恨不及］及ばざることを残念に思う。晋・陶淵明「讀山海經」十三首其三（『陶淵明集』巻四）に「恨不及周穆、託乘一來游」とある。唐・陳子昂「同宋參軍之問夢趙六贈盧陳二子之作」詩（『全唐詩』巻八三）「丹丘恨不及、白露已蒼蒼」とある。
［喫郷鱸］鱸魚を食べる。蓴羹鱸膾の典拠より、故郷を思う気持ちを表す。
５臨別欲贐無一物　６且呵凍筆訴吾愚
［臨別］別れんとする。南朝梁・何遜「往晉陵聯句」詩（『何水部集』巻二）に「臨別我傷悲、送歸子自適」とある。唐・元稹「酬獨孤二十六送歸通州」詩（『元氏長慶集』巻八）に「我有平生志、臨別將具論」とある。
［贐］餞別を贈る。
［無一物］何ひとつ無いこと。唐・李白「寄上呉王」詩（『李太白集』巻一二）に「去時無一物、東壁挂胡床」とある。
［呵凍筆］寒中に筆をとる際、凍っている筆やすずりに息をはく。五代・王仁裕「美人呵筆」（『開元天宝遺事』巻下）に「李白于便殿對明皇撰詔誥、時十月大寒、筆凍莫能書字。帝勅宮嬪十人、侍于李白左右、令各執牙筆呵之、遂取而書其詔、其受聖眷如此」と見える。宋・范成大「南塘冬夜倡和」詩（『宋詩鈔』巻六一）に「寒釭欲暗吟方苦、凍筆難驅字更遒」とある。
［訴］心情を告げる。唐・白居易「琵琶行」詩（『白氏文集』巻一二）に「絃絃掩抑聲聲思、似訴平生不得志」とある。
７明年廣陵逢今日　８君誦此詩憶吾無
［明年］その人が現在身を置いている次の年。あくるとし。来年。唐・劉廷芝「代悲白頭翁」詩（『楽府詩集』巻四一）に「今年花落顔色改、明年花開復誰在」とある。
［廣陵］広島のこと。江村北海『日本詩史』凡例に「金澤為金陵、廣島為廣陵之類」と見える。
［今日］別の年・月の同じ日付の日。唐・韋応物「寄李儋元錫」詩（『全唐詩』巻一八八）に「去年花裏逢君別、今日花開已一年」とある。
［誦］声を上げて詠む。
［憶］回想する。思いめぐらす。

［無］でしょうか。文末に用いて疑問を示す。「否」と同じ。

10　「憶母及兄（母及び兄を憶ふ）」（12月）

【本文及び書き下し】

１孤燈耿耿夢難成　　孤灯　耿耿（かうかう）として　夢成り難し
２春雨江城夜幾更　　春雨　江城　夜や幾更（いくかう）
３豫識他時北堂下　　予め識（あらかじ し）る　他時（た じ）　北堂（ほくだう）の下（もと）
４對床當話此時情　　対床（たいしゃう）　当に話すべし　此の時の情（こころ）

【日本語訳】

０母と兄を偲ぶ
１ともしびは一つだけともっている、なかなか寝られない
２川のほとりにある町（大坂）に春の雨は降っている、夜の何時ごろだろうか
３いつかほかの時に母のところにいることを前もって分かれば
４床を並べて一緒にこの時の気持ちを語り合おう

【校勘】

○『詩集』、木崎本、安藤本
　異同無

【押韻】

「更」、「情」下平八庚韻。

【語釈】

０憶母及兄
［憶］懐かしく思う。
［母及兄］母・梨影（1797～1855）と兄・支峰（1823～1889）。
１孤燈耿耿夢難成　２春雨江城夜幾更
［孤燈］一つだけともっている灯火。寂しさを表す。南朝宋・謝恵連「秋懐」詩（『文選』巻二三）に「寒商動清閨、孤燈曖幽幔」とあり、唐・白居易「長恨歌」詩（『白氏文集』巻一二）に「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠」とあり、宋・陸游「山寺」詩（『剣南詩稿』巻二）に「古佛負牆塵漠漠、孤燈照殿雨昏昏」と見える。
［耿耿］きらきら光っているさま。南朝斉・謝朓「暫使下都夜発新林至京邑」詩（『文選』巻二六）に「秋河曙耿耿、寒渚夜蒼蒼」とあり、唐・白居易「長

恨歌」詩（『白氏文集』巻一二）に「遅遅鐘鼓初長夜、耿耿星河欲曙天」とある。
［夢難成］夢が実現しにくい。なかなか寝られないさま。唐・李煜「望遠行」詩（『全唐詩』巻八八九）に「餘寒欲去夢難成、爐香煙冷自亭亭」とある。
［春雨］春の雨。『庄子』外物に「春雨日時、草木怒生」と見える。南朝梁・蕭鋼「京洛篇」詩（『芸文類聚』巻四二）に「秋霜曉驅雁、春雨暮成虹」とあり、唐・白居易「寒食臥病」詩（『白氏文集』巻一三）に「病逢佳節長嘆息、春雨濛濛榆柳色」とある。
［江城］川のほとりにある町。ここは大坂をいう。唐・劉長卿「西庭夜燕喜評事兄拜會」詩（『文苑英華』巻二一五）に「猶是南州吏、江城又一春」とある。宋末元初・劉辰翁「唐多令」其八（『須溪集』巻九）に「春雨滿江城、汀洲春水生」とある。
［夜幾更］夜の何時ごろだろうか。宋・呂定「金陵旅夜」詩（『石倉歴代詩選』巻二二〇）に「火煙亭館春多少、鐘鼓樓臺夜幾更」とある。
３豫識他時北堂下　４對床當話此時情
［豫識］前もって知ること。
［他時］将来。いつかほかの時。唐・劉長卿「送裴四判官赴河西軍試」詩（『文苑英華』巻二九六）に「他時相望處、明月西南樓」とある。唐・徐鉉「送郝郎中為浙西判官」詩（『全唐詩』七五二）に「若許他時作閑伴、殷勤為買釣魚船」とある。
［北堂］母の居室。宋・王禹偁「寄金鄉張贊善」詩（『宋詩鈔』巻一）に「北堂侍膳侵星起、南畝催耕冒雨歸」とある。また母の尊称。唐・李白「贈歴陽褚司馬」詩（『李太白集』巻十）に「北堂千萬壽、侍奉有光輝」とあり、宋・王安石「和微之林亭」（『臨川先生文集』巻二三）に「中園日涉非無趣、保此千鍾慰北堂」とある。
［對床］寝台を並べている意で、兄弟や親友の親しさをいう。唐・韋応物「示全真元常」詩（『文苑英華』巻二五五）に「寧知風雪夜、復此對床眠」とある。宋・蘇轍「舟次磁湖以風浪留二日不得進子瞻以詩見寄作」詩（『欒城集』巻一〇）に「夜深魂夢先飛去、風雨對床聞曉鐘」とあり、宋・蘇軾「滿江紅・懐子由作」（『東坡詞』）に「辜負當年林下意、對床夜雨聽蕭瑟」とある。
［話］言う。かたる。唐・孟浩然「過故人莊」詩（『孟浩然集』巻四）に「開筵面場圃、把酒話桑麻」とある。

［此時情］この時の感情。唐・韓愈「次石頭驛寄江西王中丞閣老」詩（『昌黎先生文集』巻一〇）に「默然都不語、應識此時情」とある。宋・聶勝瓊「鷓鴣天」（『唐宋諸賢絶妙詞選』巻一〇）に「尋好夢、夢難成、有誰知我此時情」とある。

11　「送五弓士憲遊江府（五弓士憲の江府に遊ぶを送る）」（12月）

【本文及び書き下し】

１多少文章元滿胸	多少　文章　元　胸に満ち
２草鞋更蹈路千里	草鞋　更に路を蹈（ふ）む　千里ならんとす
３最羨今年屢大雪	最も羨（うらや）む　今年　屢（しばしば）大雪あり
４看過天際玉芙蓉	看過す　天際の玉芙蓉

【日本語訳】

０五弓士憲が江戸に遊歴することを送る
１たくさんの文章が心中にみちあふれて
２わらじを履いたまま更に遠い路を歩く
３最も羨ましく思うのは今年によく大雪を降って
４天辺に雪に覆われて美しい富士山に目を通すことだ

【校勘】

○『詩集』、木崎本、安藤本
２「蹈」、木崎本作「踏」。
３「最羨今年」、『詩集』作「今年最羨」。

【押韻】

「里」、上声四紙韻。「蓉」、上平二冬韻。

【語釈】

０送五弓士憲遊江府
［五弓士憲］五弓久文（1823～1886）。江戸後期～明治時代の儒者。字は士憲。通称は豊太郎。号は雪窓など。当年19歳。生家は備後（広島県）府中八幡宮神職。後藤松陰、斎藤拙堂に師事し、昌平学でまなぶ。文久三年備後福山藩士となり、藩校誠之館でおしえる。維新後は太政官修史局などに出仕。四十年余をかけ、近世の伝記記事をあつめ「事実文編」を編集した。（『日本人名大辞典』より）
［江府］江戸の異称。

１多少文章元滿胸　２草鞋更蹈路千里

［多少］「少」は助字、多いこと。十分なこと。唐・杜牧「江南春」詩（『樊川文集』巻三）に「南朝四百八十寺、多少樓台煙雨中」とある。

［文章］文。また特に漢詩文。唐・杜甫「偶題」詩（『杜工部集』巻一五）に「文章千古事、得失寸心知」とある。

［元］本来。もともと。もとより。宋・陸游「示兒」詩（『劍南詩稿』）に「死去元知萬事空、但悲不見九州同」とある。

［滿胸］心中にみちあふれること。胸いっぱい。魏・左思「悼離贈妹」二首其二（『芸文類聚』巻二九）に「含辞滿胸、欝煩不舒」とある。梁川星巌「三吊」詩（『星巌集』戊集・玉池生後集）に「四十余年道路塵、滿胸蟠屈大経綸」とある。

［草鞋］わらじ。草履。宋・劉克莊「雑詠七言二首」其二（『後村集』巻四六）に「清禁已無蓮炬分、名山尚欠草鞋緣」とある。頼山陽「侍輿短歌」（『山陽詩鈔』巻八）に「母坐籃輿兒草鞋、隔著輿窓相伝杯」とある。

［蹈］行く。赴く。『春秋左伝正義』哀公二十年に「魯人之皐、數年不覺使我高蹈」杜預注に「高蹈、猶遠行也」とある。

［千里］非常に遠い道のり。『春秋左伝正義』僖公三十二年に「師之所為、鄭必知之、勤而無所、必有悖心、且行千里、其誰不知公辭焉」とある。晋・劉琨「重贈盧諶一首」詩（『文選』巻二五）に「鄧生何感激、千里來相求」とある。

３最羨今年屢大雪　４看過天際玉芙蓉

［最羨］最もうらやましく思う。唐・李德裕「憶春雨」詩（『全唐詩』巻四七五）に「最羨歸飛燕、年年在故郷」とある。

［今年］本年。この年。宋・蘇軾「九日黄樓作」詩（『東坡集』巻一〇）に「豈知還復有今年、把盞對花容一呷」とある。宋・陸游「豐年行」詩（『劍南詩稿』巻三四）に「豈知還復有今年、酒肉如山賽春社」とある。

［屢］何度も。『詩経』小雅・正月「屢顧爾僕、不輸爾載」とあり、鄭玄箋に「屢、數也」とある。南朝宋・鮑照「擬古」詩（『文選』巻三一）に「漢虜方未和、邊城屢翻覆」とある。

［大雪］雪が大量に降ること。また、大量に降り積もった雪。唐・盧綸「和張僕射塞下曲」詩（『全唐詩』巻二七八）に「欲將輕騎逐、大雪滿弓刀」とある。

［看過］目を通す。唐・劉禹錫「送廖参謀東游」二首其一に「望嵩楼上忽相見、看過花開花落時」とある。
［天際］天のはて。天のきわ。空のずっと遠くの方。南朝斉・謝朓「之宣城出新林浦向版橋」詩（『文選』巻二七）に「天際識歸舟、雲中辨江樹」とある。唐・李白「黄鶴樓送孟浩然之廣陵」詩（『李太白集』巻一三）に「孤帆遠影（一作映）碧山（一作空）盡、唯見長江天際流」とある。
［玉芙蓉］美しい富士山。「芙蓉」富士山の異名。富士山の頂は八朶の蓮花のように剣峰が八つあって火口を囲んで居るから、蓮嶽又は芙蓉峰と言う。柴野栗山「富士山」詩（『栗山堂詩集』巻一）に「誰将東海水、濯出玉芙蓉」とある。